

# 巻頭言

## 「ヒアラブル端末」

理事長 新谷 友良

最近、補聴器のようなイヤホンを耳に付けている人を多く見かけます。スマートフォンの音楽などを聴くための端末で、無線でイヤホンと繋がっているのでコードが邪魔にならず便利なようです。

このイヤホンはどんどん進化を遂げていて、今では「ヒアラブル端末」といったものが多く実用化されています。スマートフォンに着信した電話をイヤホンで聞き、イヤホン内蔵のマイクで応答することができます。また「この近くのおすすめの喫茶店は？」と普通にしゃべれば、イヤホンがスマートフォンのA1機能を利用して「この道を真っすぐに100mぐらい行くと左側におしゃれな喫茶店があります」などと返事をするそうです。「これまでは目と手で行っていたことも、これからは口と耳が代替してくれる。耳は新たなインターフェースとして期待を集めている」と宣伝されています。

この話を聞いて、複雑な思いがしました。耳にかけた補聴器や人工内耳の外部機器をイヤホンと間違われるのは我慢するとしても、ヒアラブル端末の進歩が私たちのように音声を満身に利用できないものを置き去りにしてしまうのではないかが不安になります。ヒアラブル端末が、情報を聴覚で利用することを目指すのであれば、聴覚を十分に利用できない人に対する配慮をどうするかを真剣に考えていただかなければなりません。

ある補聴器メーカーは「補聴器の機能はヒアラブル端末への応用に、大きな可能性を秘めています」といっています。高性能なマイク、雑音除去、聞こえやすい音質など補聴器や人工内耳外部機器が培ってきたさまざまな技術がヒアラブル端末と非常に親和性を持つことは容易に想像できます。そして、補聴器や人工内耳の装用効果の大きい人には補聴器とヒアラブル端末との融合は、歓迎すべき方向なのかもしれません。

現在、ヒアラブル端末は聞こえる人にとっての利便性を求めて開発されています。圧倒的に多数の聞こえる人を念頭に置いた、ユニバーサルデザインの視点を無視した技術開発が進んでいけば、聞こえない人を排除する歴史がまた繰り返されます。聞こえの領域の製品開発には私たちも関心を持ち、隅々に目を配っていく必要があると思っています。